

策定プロセス訪問調査事例

大分県武蔵町

母子保健計画策定プロセスに関する調査票

市町村名 (大分県 武蔵町)

記載担当者名 (愛媛県 三木優子)

	市 町 村		保健所の関与
	市町村行政内部の作業	住民参加	
<p>【Ⅰ】事例の概要</p> <p>◆事例検討に当たって理解しておくべき背景</p> <p>・人口、地理的条件、社会資源等</p> <p>・市町村の組織体性等</p> <p>・住民組織の成熟度等</p> <p>・県の取り組みと保健所の特徴</p> <p>・その他</p>	<p>・人口 5,713人(H9年10月1日) 出生数54人(H8年) 高齢化率25.1%(H9年10月1日) 人口は緩やかな減少傾向。出生率も漸減傾向だが、全国平均より高い。H6年合計特殊出生率は1.63。(全国は1.50)</p> <p>・地理的には温暖な農業地帯かつ「テクノポリス」指定により誘致企業も多く、雇用の場を提供している。総面積41.80km、東西13km、南北5km、20分程度で町内を回れ、移動性のよい地域である。</p> <p>・町組織体制：母子保健福祉計画に関しては保健衛生課と福祉課が担当 保健婦係長1名、ほか保健婦1名、看護婦2名</p> <p>◎大分県内では藤内修二保健所長の保健婦研修会が多く、町づくり型の計画策定が効果ありと宣伝をしていた。そのため保健婦全体に健康な町づくりについての学習意欲が高かった。(市町村保健婦全体に『蘇陽風が吹いている』状況だった。)また大分県では保健婦が10年来自主的な勉強会を開いていた。(月1回休日に開催)</p> <p>◎母子保健計画のみでなく、エンゼルプランと併せた母子保健福祉計画が必要と感じていた。</p>		<p>管轄保健所：国東保健所</p> <p>管内は4町1村で38,920人(H8年10月1日)</p> <p>◎県の母子保健計画研修会で、藤内所長が町づくり型計画策定について講演。</p> <p>◎毎月管内保健婦研修会として定例の連絡会議が開催されており、この場を利用して情報交換を行った。従来、の保健計画のむなしさ、限界を知っていたので、今回は町づくり型の計画策定を行うよう指導。</p>
<p>【Ⅱ】計画策定の準備</p> <p>◆計画策定の目的、策定の手法等の合意形成</p> <p>①合意形成のキーマン</p> <p>②範囲</p> <p>・首長、財政、他課、議会、住民組織、医師会等</p> <p>③合意形成の手法</p> <p>・個別調整、会議、研修・勉強会等</p> <p>④策定体制の有無、構成、運営</p>	<p>◎母子保健福祉計画策定「よろうち(一緒に)さかしい(元氣な)武蔵っ子を育つ町づくり」が大分県看護協会の先駆的事業に決定。</p> <p>◎保健所スタッフも加わり、課内の意思統一を図る。</p> <p>『従来の計画づくりから脱皮して役場職員・住民とともに考える計画づくりをしていこう』</p> <p>◎課長が町長の理解を得、課長会議にかけて、各課長に協力要請、承認される。</p> <p>◎看護協会地区ブロック保健婦と保健所母子担当保健婦を交え、策定体制、規約、メンバーを検討</p> <p>・できるだけ地域の人の意見や意向を重視し、時間がかかってもみんなで作っていく過程を大切にしていくことを確認。</p> <p>・人選のポイントはこれからの町づくりに重要な役割を果たすと期待できる人、欠かせない人。住民組織代表は行政サイドにも相応の意見具申が組織的にでき、積極的に発言ができる人 会長は特に関係部局の課長と対等に話ができ、役場に向向いでも意見を述べられる人</p> <p>◎策定体制は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検討委員会(年2回会合) ・実務者レベルの作業部会(月1回) ・実質企画をする事務局の会合(週1回毎週金夜6～9時) 	<p>◎関係団体と普段の活動の中で人脈、意識交流があり計画づくりの参入は意義がなかった。検討委員会、作業部会とも住民の代表がメンバーとして多数参加。(愛育会、健やか会、民生委員、身体障害者連絡協議会、ボランティア連絡協議会、PTA、児童館代表、育児学級代表、教育委員、婦人会など)</p> <p>◎住民代表も検討委員会発開式での『健康づくりは町づくりである』内容の講演を通して、計画策定の意義を認識し、積極的に参加することとなった。</p>	<p>◎保健所長が町長、助役に役場全体で検討していくことの重要性を説得。</p> <p>◎保健婦長が積極的に新任担当課長に説明。</p> <p>◎藤内所長(管轄外)が検討委員会発会式で講演し、関係者にみんなで計画づくりをする必要性をアピール。</p> <p>◎その後の検討委員会や研修会にも必要に応じて参加し、ブレイクスルー思考の学習、実践に導いた。</p> <p>◎保健所職員が検討委員会や作業部会にもメンバーとして参加。</p> <p>◎週1回の事務局レベルでの会議に婦長、母子担当保健婦も積極的に参加した。</p> <p>看護協会の関与：</p> <p>◎看護協会事業でもありということで、全面的支援。会長と地区長(保健所保健婦長)が助役はじめ関係課長等にプラン策定の趣旨を説明。</p> <p>◎また地区ブロックの市町村保健婦、保健所保健婦等の職能団体が一致団結してチームを作り、毎週の事務局会議に参加して、検討委員会や作業部会の円滑な実施のための準備を行った。</p>
<p>◆その他、計画策定のための環境づくり</p> <p>・予算</p> <p>・人的体制</p> <p>・時間の確保</p> <p>・その他</p>	<p>◎全額補助で必要な予算獲得の手段があったため、役場でも計画策定がスムーズに受け入れられた。</p> <p>・大分県看護協会が先駆的保健活動推進事業に補助金。(100万円)</p> <p>◎関係課の時間外労働は認められなかった。(毎週の夜の事務局会議は手当なし)</p> <p>◎一般住民なども会合への報酬、旅費は一切なく、ボランティアで来てもらった。</p>		<p>◎保健所保健婦長が看護協会地区長をしており、看護協会の事業に乗せることをアドバイス、申請書の書き方等相談に乗り、協会にかけあいに出席してくれた。</p>
<p>【Ⅲ】地域の実態、住民ニーズの把握</p> <p>①地域の実態、住民ニーズ把握の視点の整理と共有化</p> <p>・キーマン、範</p>	<p>◎作業部会でのブレークスルーによる話し合いがメイン。「武蔵町の子どもたちがどげあったらいいか」自由に意見発表。その結果から基本理念、基本目標を導きだし、3つの基本目標毎に専門部会を設置。グループ及び全体討議を繰り返した。また基本目標に添って住民へのアンケートを作成した。何度か修正後、実施したアンケートは事務局で集計、分析した。(妊娠婦、小中学生及びその保護者、高校生、成人、祖父</p>	<p>◎作業部会に熱心に参加、ブレイクスルーによる町づくりを学習し、討論を行った。</p> <p>◎はじめは正体不明、何をやっているのかどんな計画ができるのかわからなかったと言っていた部</p>	<p>◎アンケートの内容、配布方法などを一緒に検討。</p> <p>◎作業部会等の記録を重視して、計画策定の足取りがよくわかるようにまとめた。(プロセス重視)</p> <p>◎保健所長、大分医科大学看護学科 波川京子先</p>

<p>② 具体的手法 ・既存資料の活用 ・住民等との対話 ・アンケート調査</p>	<p>母) ◎事務局会議では作業部会での意見を集約したり、資料を用意、作業部会のねらいや進め方などについて検討し、コーディネートしていった。 ◎途中、町長を始め関係部局、各職域職場に経過報告及び意見収集を行った。 ◎関係団体にも会議のたびに周知、意見収集を行った。 ◎町広報、保健だより、小学校広報にも掲載し、広い範囲で意見を募集した。 ◎作業部会で先進地視察研修を行った。山国町や玖珠町の「こどもの王国」プランの策定経過、効果を学習した。 ◎ブレイクスルーの学習、話し合いによる合意形成などに十分な時間をかけたので、結局計画策定は平成8年度末に中間報告、平成9年に完成という運びになった。平成9年度は大分県の「よい子の育つ町づくり」事業の指定を受け、予算が確保された。(200万円) また、役場内では、平成8年は保健衛生課が所管し、平成9年には福祉課に移ったが、混乱はなかった。</p>	<p>会員が楽しんで参加するようになり、出席もよかった。 ◎行政の関係部局の出席が悪い時など、むしろ住民の方が積極的に参加を呼びかけた。(助役をしっかり召集するよう働きかけ。) ◎各組織団体、専門機関での話し合いを作業部会員が中心になって行うようにした。 (保育園、愛育班、育児学級等)</p>	<p>生にアドバイスを受ける。 ◎平成9年度は大分県の「よい子の育つ町づくり事業」に指定されて、計画策定のための予算が確保できるよう働きかけた。 看護協会の関与： ◎地区ブロック保健婦職能委員が作業部会のグループワークにリーダーとして入り、意見を引き出したり、雰囲気作りに努めた。 ◎地区ブロック会員が週1回の事務局会議に継続して参加、支援するとともに、会員自らの学習の場にもなり、武蔵町の計画手法を参考に、他の町村にも同様の動きが広がった。</p>
<p>② 内容 ・具体的目標、数値目標評価指標</p>	<p>作業部会での徹底した話し合い(グループワークと全体討議の繰り返し)で進めていった。 ◎アンケートの結果を作業部会でグループ協議、分析し発表。(地域の現状、課題の検討。) ◎庁内各課や各専門機関の既存事業の内容を作業部会でグループ協議、分析し発表。(行政等のサービスの現状、課題の検討。) ◎上記の内容をグループで協議、比較検討し、目標を設定。作業部会の話し合いの中から計画の原案づくりを行う。 ◎その後全体会議でさらに意見交換、補足を行い、目標値の設定、サービスの方向について協議。(毎月1回) ◎数値目標、評価の指標づくりが難しかった。</p>	<p>◎作業部会では原案づくり、見直し、修正までグループおよび全体で協議を繰り返したので主体的発言が多かった。 ◎検討委員会の会長にほめられたり、自分たちが建てた計画が評価され、話し合いが活発になった。</p>	<p>◎母子保健担当保健婦が毎回出席、原案づくりに努力した。</p>
<p>② 内容 ・10年度予算への反映 ・計画の進行管理組織体制 ・住民、関係機関への周知等</p>	<p>◎作業部会で平成10年度から取り組む課題を提言。(緊急課題等、優先順位をつける) ◎当面、要望事項を関係部局で検討。エンゼルプランによるものとして計上。 平成10年は母子保健福祉計画を地域に浸透させることが最優先。 ◎新規事業『児童環境づくり推進委員会』設置。作業部会を名称を変更して継続開催とする。(町単独事業で引き続き計画の進行管理、評価、見直しなどを行ってもらう。) ◎新規(継続)事業として「子育てを考える集い」を講演を含めて実施する。 ◎計画のダイジェスト版を全戸に発行する。 この他に ◎こどもの活動の推進・新規事業『ちびっこ環境委員会』の設置。 (平成9年度開始。)</p>	<p>◎早くに実現してほしいもの、実現できるものを継続協議していこうという姿勢ができた。 ◎いろんな会合へ出席するといった積極的姿勢がみられるようになった。 ◎作業部会員が中心となって各組織、団体で話し合いをした結果、それぞれが独自の取り組みを実施することとなった。 愛育班では、独自の取り組みとして「あいさつ運動」を実施することになった。また、「愛育便り」(毎月全戸配布)に母子保健福祉計画について連載記事掲載。 育児グループにおもちゃ図書館事業を導入。</p>	<p>◎委員会のメンバーに残った。</p>
<p>② 内容 ・全体を通じた事例のまとめ(キーワードも記入)</p>	<p>◎ブレイクスルー法を強力に指導し、実践に導いた保健所長の存在 町長から担当者、住民代表などの策定スタッフまで計画の必要性および策定方法の合意が形成されていた。 ◎看護協会の支援 他地域の保健婦職能委員もスタッフとして参加することにより、作業部会が活性化するとともに、周辺地域でも同じ取り組みがみられ、波及効果があった。 ◎行政職員と住民がともに学習し、討論を繰り返して行った計画づくり 計画に住民のニーズを反映することができた。また、住民側も行政職員と討論を重ね、学習を深めたために、地域課題の捉え方や住民の果たすべき役割など、認識を深めることができ、住民組織、団体独自の新しい取り組みにもつながった。引き続き作業部会のメンバーで母子保健福祉計画の進行管理や見直しを行う体制も整えられた。 ◎予算獲得の方法があったので、庁内の合意も得られやすく、計画がたてやすかった。 ◎母子保健福祉計画のみならず、今後同様の手法で町づくりを考えていくような意識が、行政側にも住民側にも出てきた。</p>		